

# I 【学生】 「授業評価アンケート」 結果報告

## 結果まとめ

授業評価アンケートは、くらしき作陽大学および作陽音楽短期大学（以下、全学）で平成30年度に開講された全授業の全履修生を対象として前期および後期の最終授業においてそれぞれ行われた。ただし、この報告書がデータとして依拠したのは、出席条件を充足している（原則として15回開講中、欠席5回以下）履修生（以下、履修生）の回答のみである。その回答からは、前年度同様、履修生が教養科目よりも専門科目を重視している傾向が窺われる。授業に対する評価は、過年度と比較すると、全体的に肯定的回答の割合が増加しつつある。

出席率は、欠席1回以下の履修生が8割以上を占め、比較的高い。だが、シラバスは全学を通じてあまり活用されていない。予習・復習などの授業外の学修時間は1時間以内と回答した履修生が8割以上いる。また、全学の履修生の7割前後が自分自身を授業評価者として適切であると評価しているが、各部署の授業評価は必ずしも一様ではない。

授業はシラバス通りに行われていたと履修生の8割前後が評価している。しかし、シラバスがあまり活用されていないという回答結果を勘案すると、額面通りには受け取れない。とはいえ、履修生の8割以上は、授業は工夫されており適切に実施され、わかりやすかったと評価している。テキスト選定や板書などの授業技術に関する評価も高く、履修生の8割前後が授業者に意欲を感じており、授業を理解できたと評価している。

授業の到達度に関しては、履修生の7割前後が目標に到達したと評価している。そして履修生の9割前後は専門科目を興味深く良い授業だと評価している。一方、教養科目を興味深く良い授業だとしたのは履修生の8割前後である。この違いは、両者の授業の質のみならず、履修生の授業に関する意識にも起因すると考えられる。教養科目または専門科目の違いにかかわらず授業の成果として最も認められたのは、知識技能の修得である。なお、教養科目により人間理解の深化、人間形成の促進、協働力の向上などがなされたという評価もある。レッスンの成果としては、表現力、知識、技術および学修への意欲が向上させられたことが挙げられている。

## 1. 調査の概要

### (1) レッスンを除く一般科目に関する回答者数（延べ人数）

開講期	所属 ＼ 学年	院	音楽	食文化 現食	食文化 栄養	子ども 教育	短大 音楽	短大 幼教	その他・ 未回答	計
前期	1	11	408	753	1511	2099	295	589	97	5763
	2	1	537	603	1405	2408	222	333	101	5610
	3	-	448	514	1021	1610	10	-	108	3711
	4	-	121	209	166	354	-	-	16	866
	未回答	0	6	14	7	21	1	1	35	85
	前期計	12	1520	2093	4110	6492	528	923	357	16035

開講期	所属 ＼ 学年	院	音楽	食文化 現食	食文化 栄養	子ども 教育	短大 音楽	短大 幼教	その他・ 未回答	計
後期	1	18	392	807	1522	1921	285	716	95	5756
	2	8	549	544	1357	1998	209	181	104	4950
	3	-	391	323	473	1483	12	-	82	2764
	4	-	131	95	222	301	-	-	24	773
	未回答	1	1	18	23	23	1	3	42	112
	後期計	27	1464	1787	3597	5726	507	900	347	14355
	年間計	39	2984	3880	7707	12218	1035	1823	704	30390

## (2) アンケートを実施した科目数（レッスンを除く）

開講期＼科目種類	教養	専門	計
前期	144	465	609
後期	139	487	626
計	283	952	1235

## (3) レッスンに関する回答者数（延べ人数）（音楽学部学生のみ）

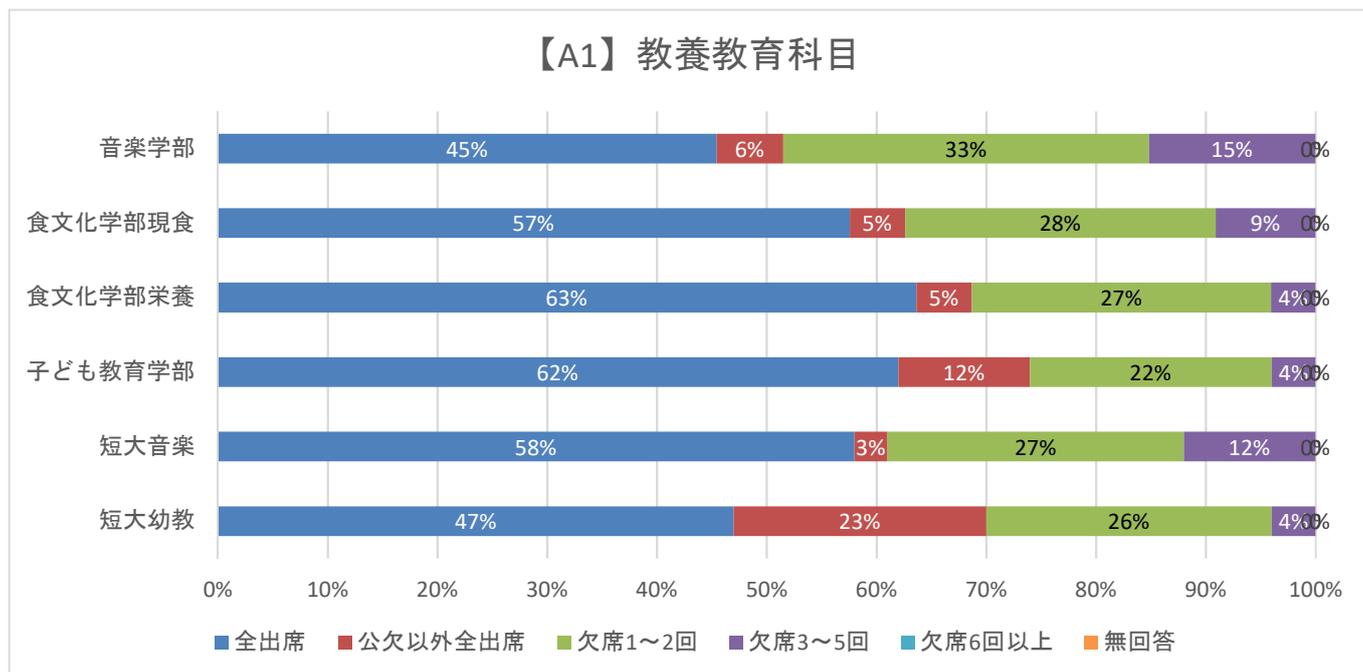
開講期	学年	回答者数（述べ人数）
前期	1	68
	2	70
	3	26
	4	37
	未回答	2
	前期計	203
後期	1	55
	2	55
	3	36
	4	17
	未回答	1
	後期計	164
	年間計	367

## 2. 調査の結果

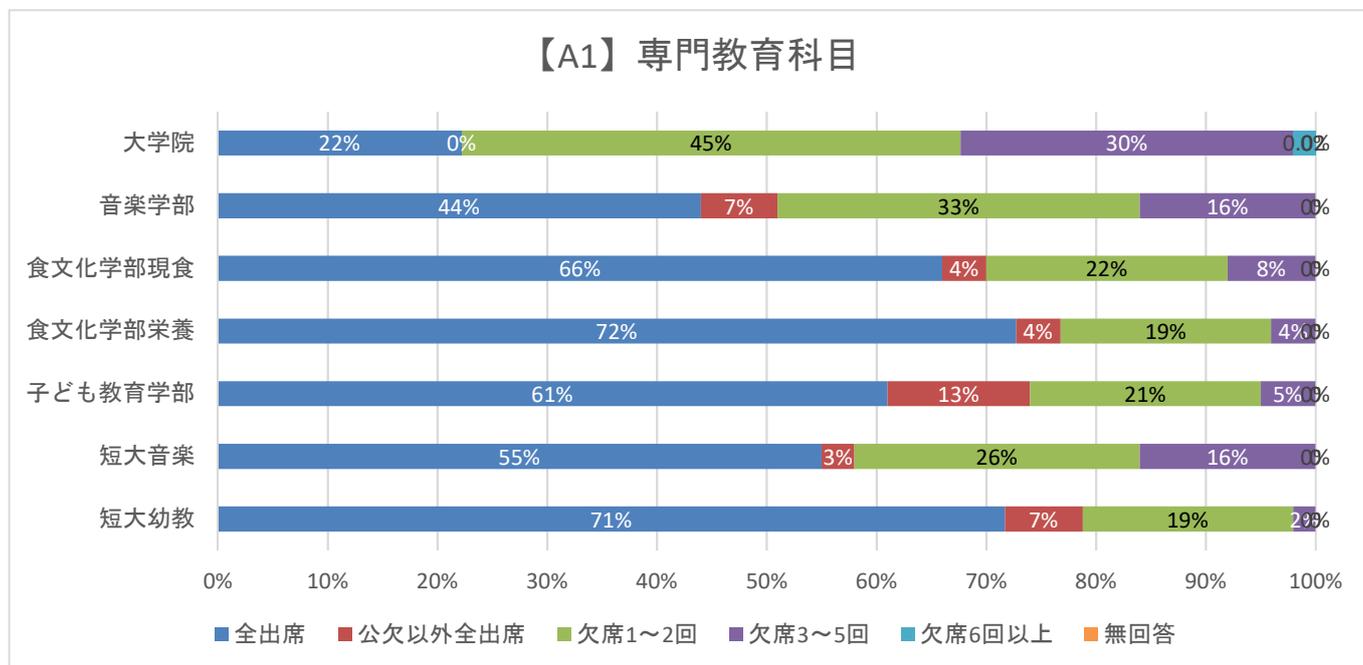
アンケート調査の結果は、次ページ以降の通りである。

## A 授業への取り組みに関する質問

### 1. あなたは授業にどの程度出席しましたか



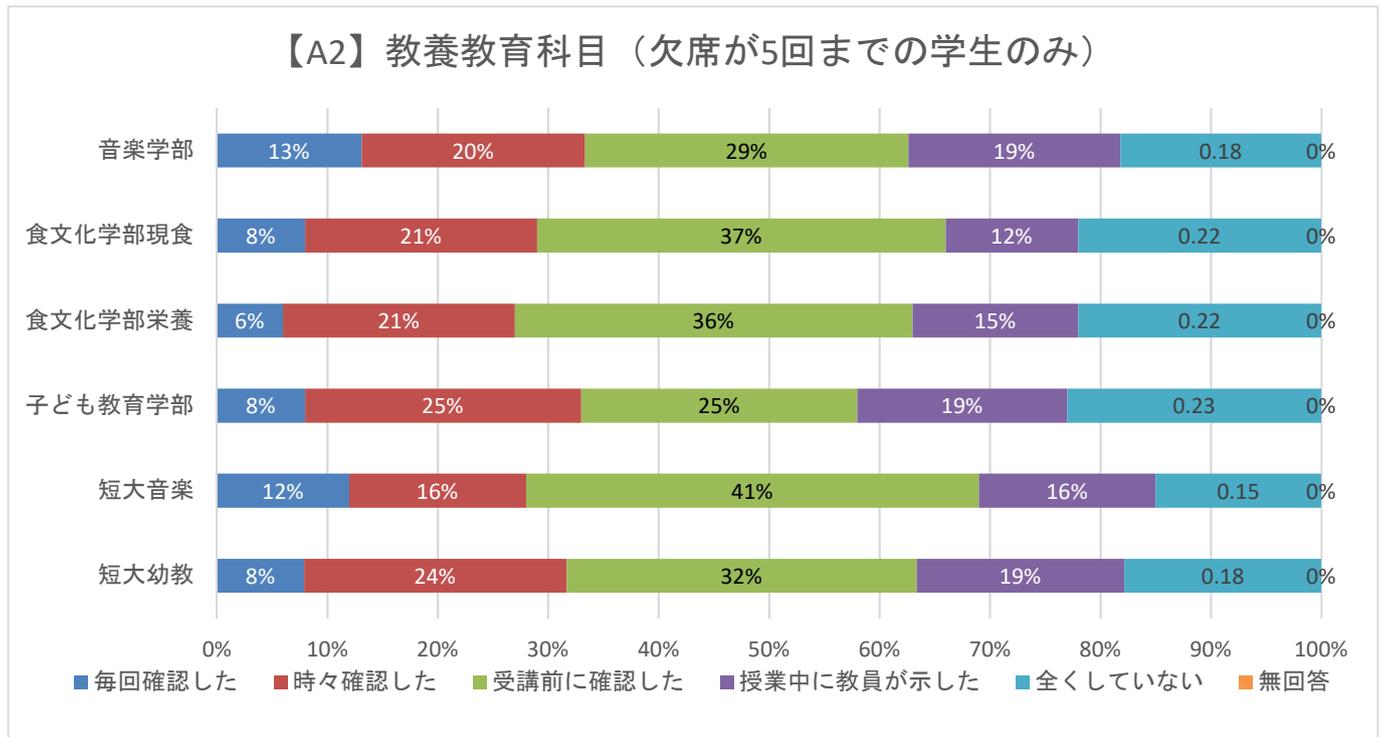
どの部局でも「全出席」という回答を行った学生の割合（回答率）が一番多く、次に多いのが「欠席1~2回」である。「全出席」、「公欠以外全出席」および「欠席1~2回」を合わせた回答率は85%~96%であり、出席へのまじめさが窺える。ただし、音楽学部生と短期大学音楽専攻生の出席率は他部局の学生の出席率と比べると低い。一方、食文化学部栄養学科生、子ども教育学部生および短大幼児教育専攻生の出席率は高い。



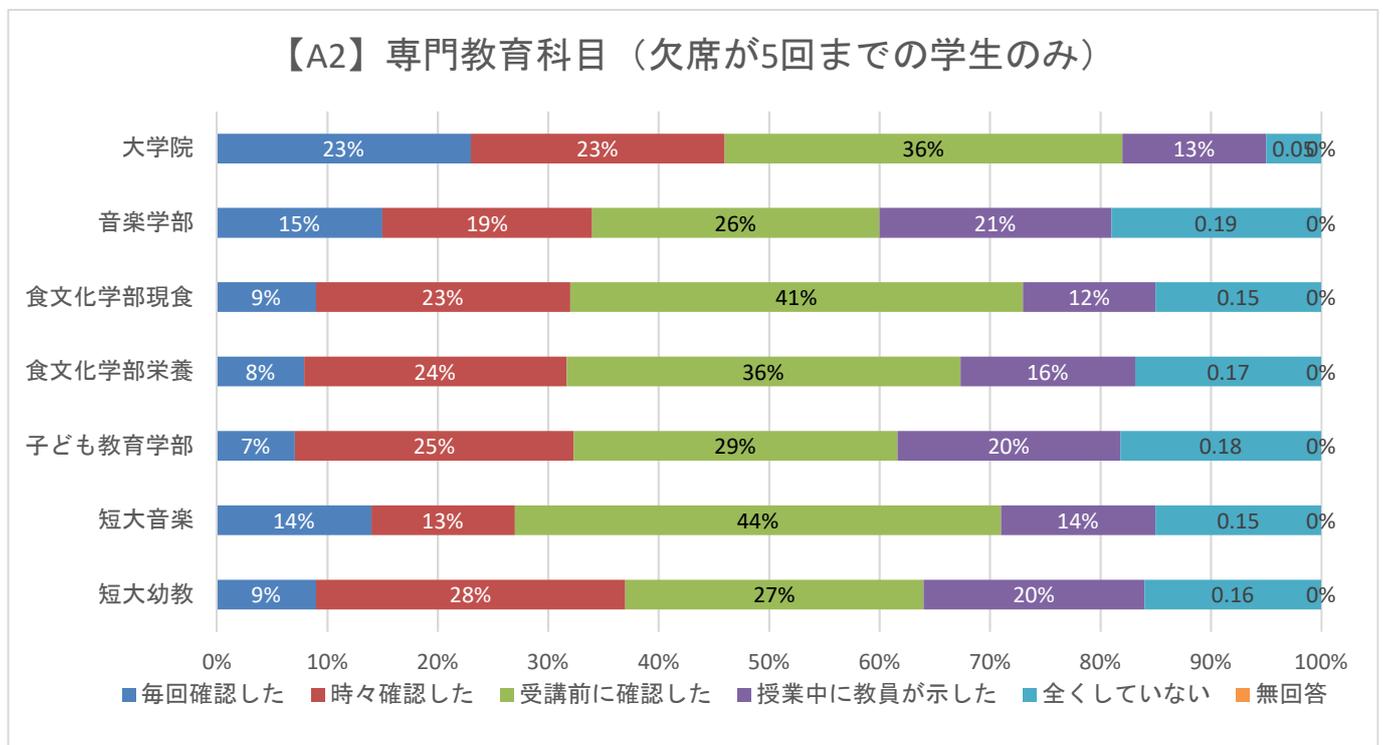
「全出席」または「公欠以外全出席」の回答率は、短大幼児教育専攻生、栄養学科生、子ども教育学部生、現代食文化学科生において高かった。別調査（大学院除く）によれば、5回以上欠席した学生の延べ人数（教養科目含む）は、音楽学部154人（H29年度325人）、現代食文化学科116人（同226人）、栄養学科102人（同112人）、子ども教育学部96人（同186人）、短大音楽専攻9人（同82人）、短大幼児教育専攻1人（同29人）であった。5回以上欠席した学生の人数は、H29の人数と比較すると、音楽学部、現代食文化学科、子ども学部においては半減した。短大音楽専攻と幼児教育専攻においては著しく減少した。一人ひとりの学生に応

じた指導が学生の授業に対する構えを改善した成果だと考えられる。

## 2. あなたは、シラバスで授業の到達目標や授業内容について確認しましたか



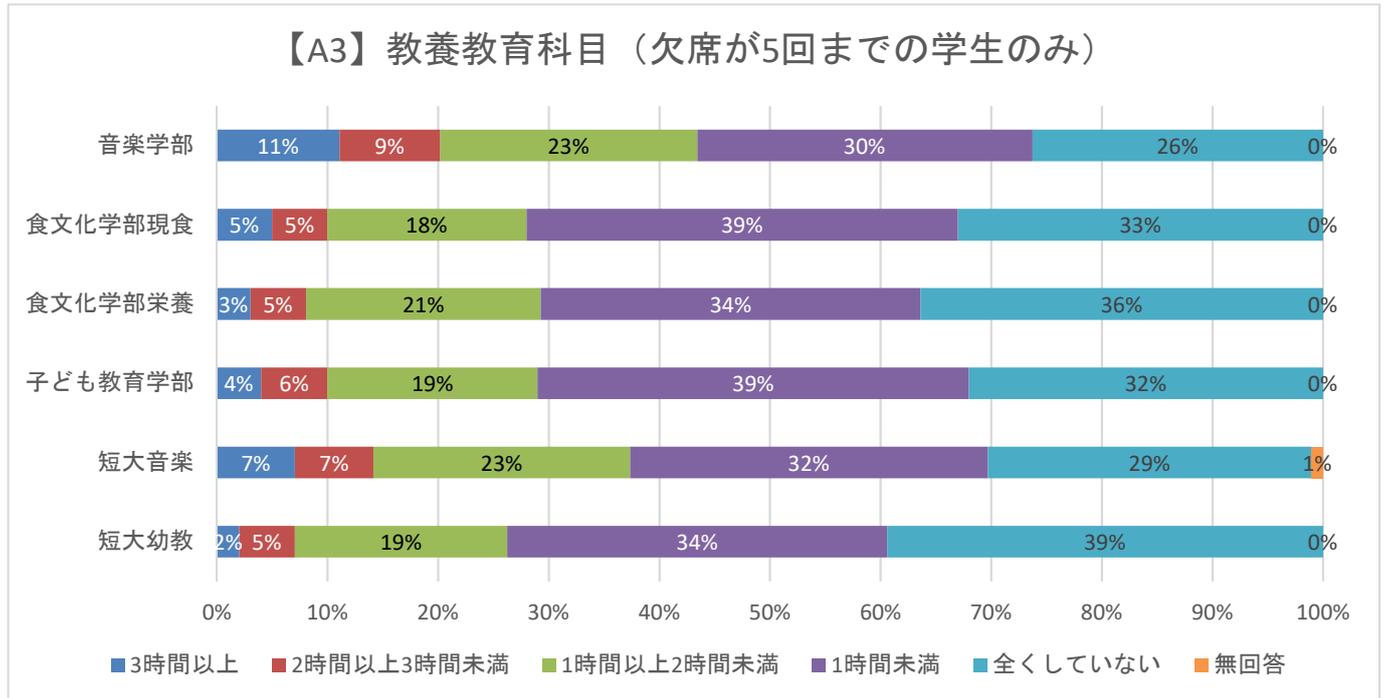
教養科目の授業の際「毎回」事前にシラバスを確認して授業に臨む学生の割合は6～13% (H29年度5%～12%) であり、その割合はどの部局においても非常に低い。「毎回確認」と「時々確認」と「(最初の授業の) 受講前に確認」という回答を合わせた割合でさえ58～69%であり、学生に受け身の姿勢が強いことが窺える。



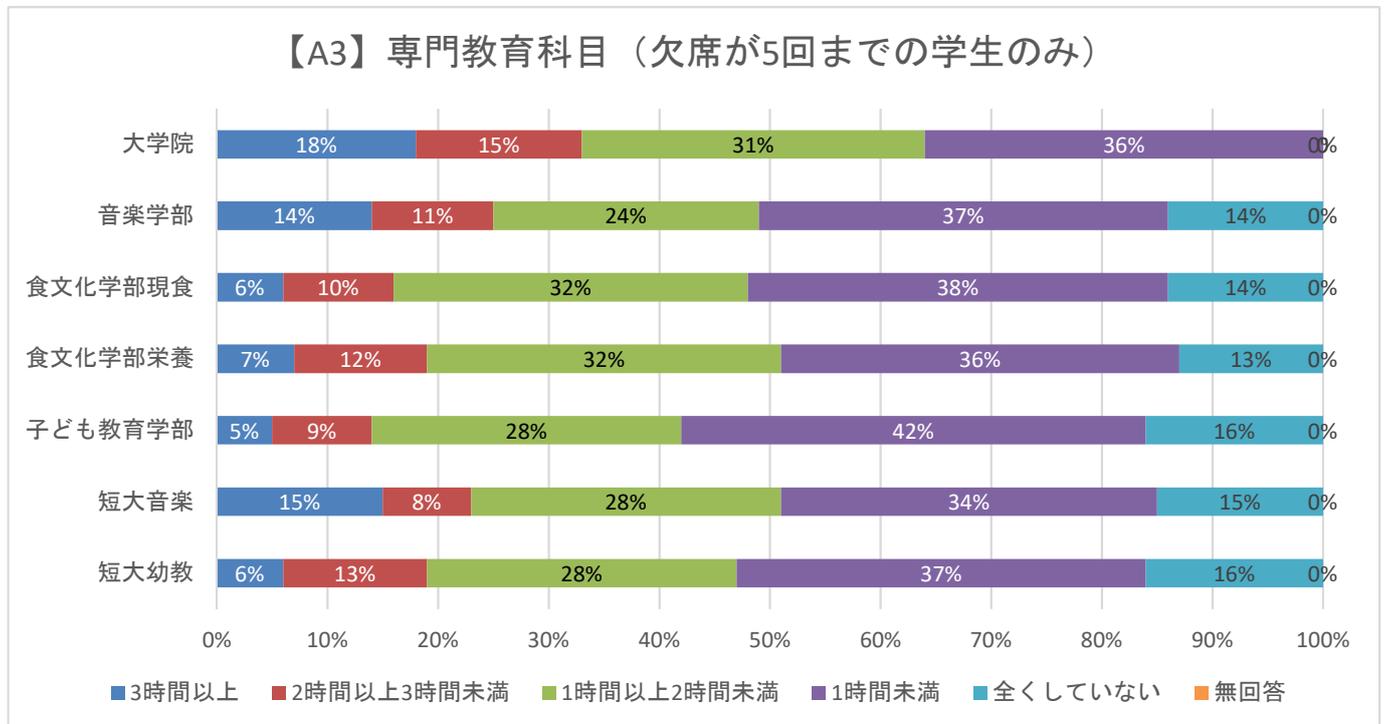
専門科目の授業の際「毎回」事前にシラバスで授業内容等を確認して授業に臨む学生の割合は、大学院生を除くと、7～15% (H29年度5%～19%) である。「毎回確認」と「時々確認」と「受講前に確認」という回答を合わせた割合でも60～73% (H29年度51%～73%) であり、教養科目に関する割合と同様、低い。専門科目に対

しても受け身の姿勢が強いことが窺える。教員の予告等がないと予習は難しいことがわかる。

3. あなたは1回の授業について1週間あたり予習復習やレポート課題などのために平均どの程度学修しましたか（演奏系科目では1日あたりの練習時間としてください）

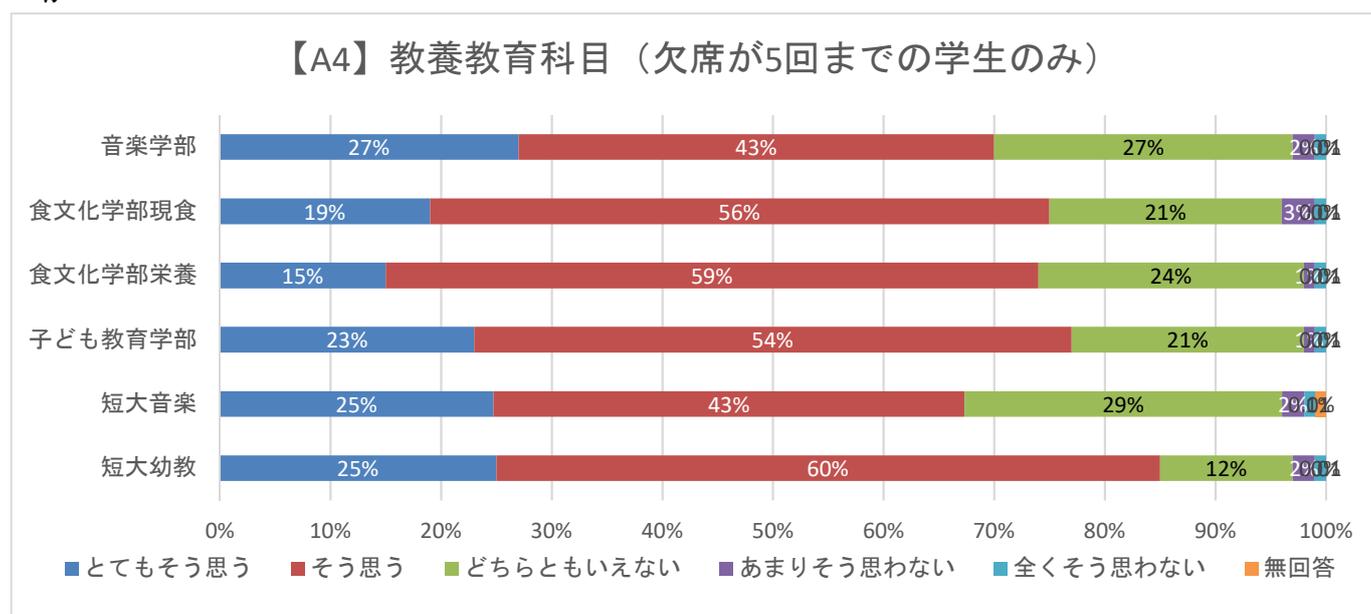


どの部局の学生においても「まったくしない」の回答率は26～39%(H29年度28～40%)であり、「1時間未満」の回答率は30～39%(H29年度35～43%)である。教養科目に関する事前事後の学修は依然不十分である。

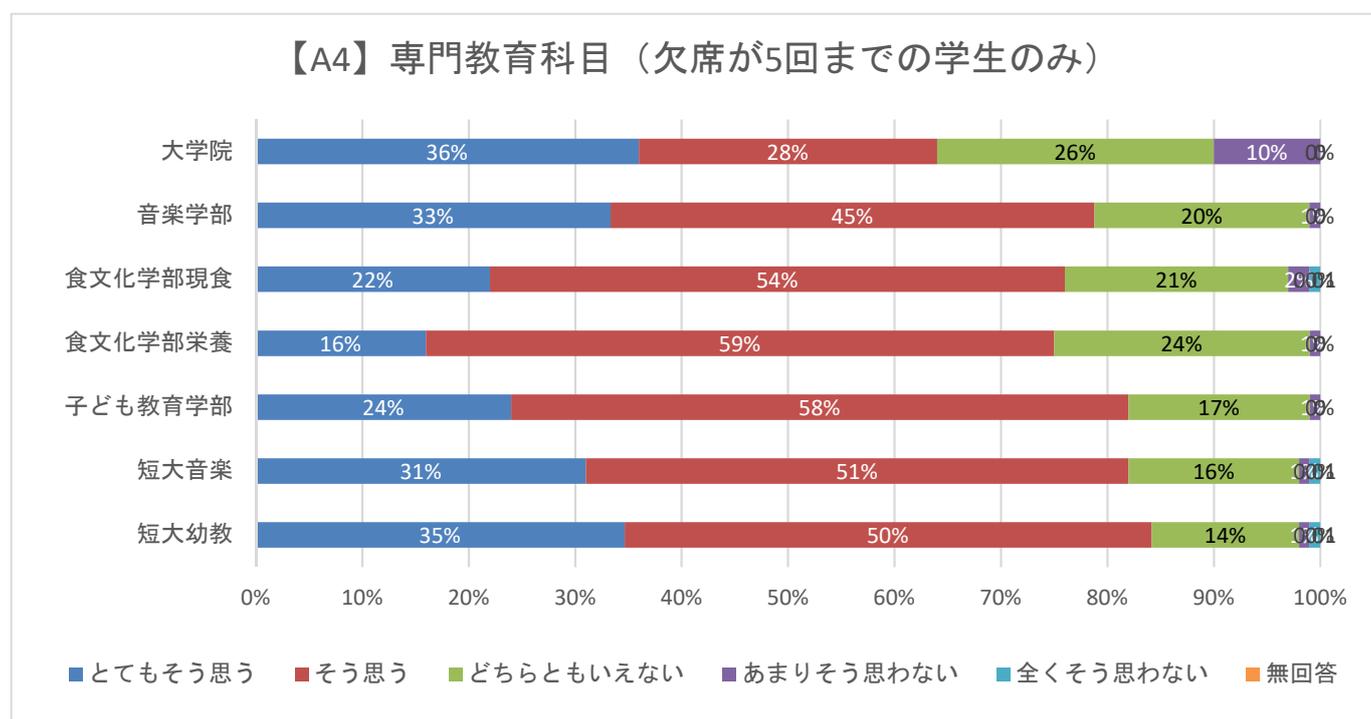


教養科目に関する回答率と比べると、「全くしない」学生の割合は半減し、事前事後の学修時間も増えている。しかし、大学院生の回答を除くと、どの部局でも「1時間未満」の学生の割合が34～42%(H29年度31～43%)であり、最も多い。したがって、学修時間は、教養科目に関してのみならず、専門科目に関しても不十分である。今後は生活実態を踏まえながら指導を強める必要がある。

4. この授業への出席状況や取り組み態度から見て、あなたはこの授業を適切に評価できると思いますか



自分自身が授業の評価者として適切かどうかについては「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と否定的に考えている学生は 2~3%(H29 年度 5%前後)にとどまっている。また、「どちらともいえない」の回答率は 12%~29%(H29 年度 24%~39%)であり、昨年の回答率と比較すると低くなっている。したがって、評価者としての自分自身を肯定する自己評価の度合いは高まっている。

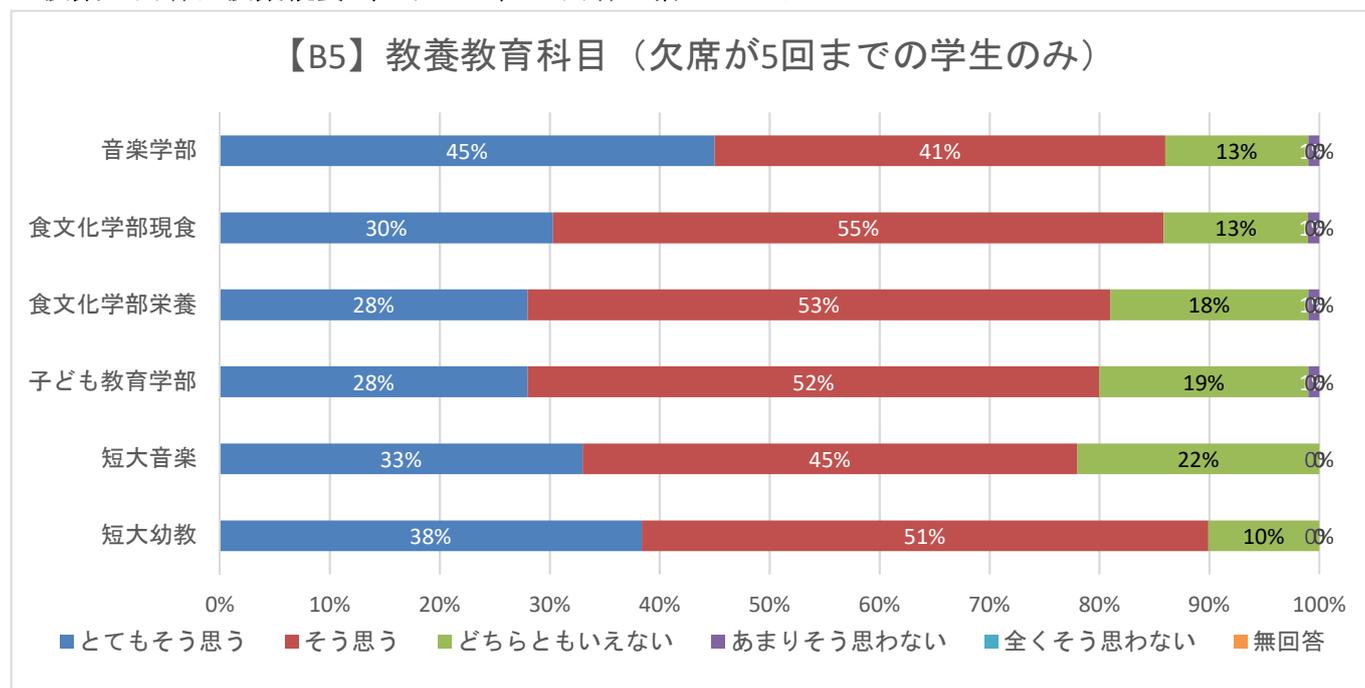


自分自身が授業の評価者として適切かどうかについて「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」と否定的に考えている学生の割合は 2~3%(H29 年度 同)と低い。一方、「どちらともいえない」の回答率は 14%~26%(H29 年度 14%~26%)であり、必ずしも低くはない。したがって、専門科目の評価者としての自分自身に関する自己評価は確定していない。

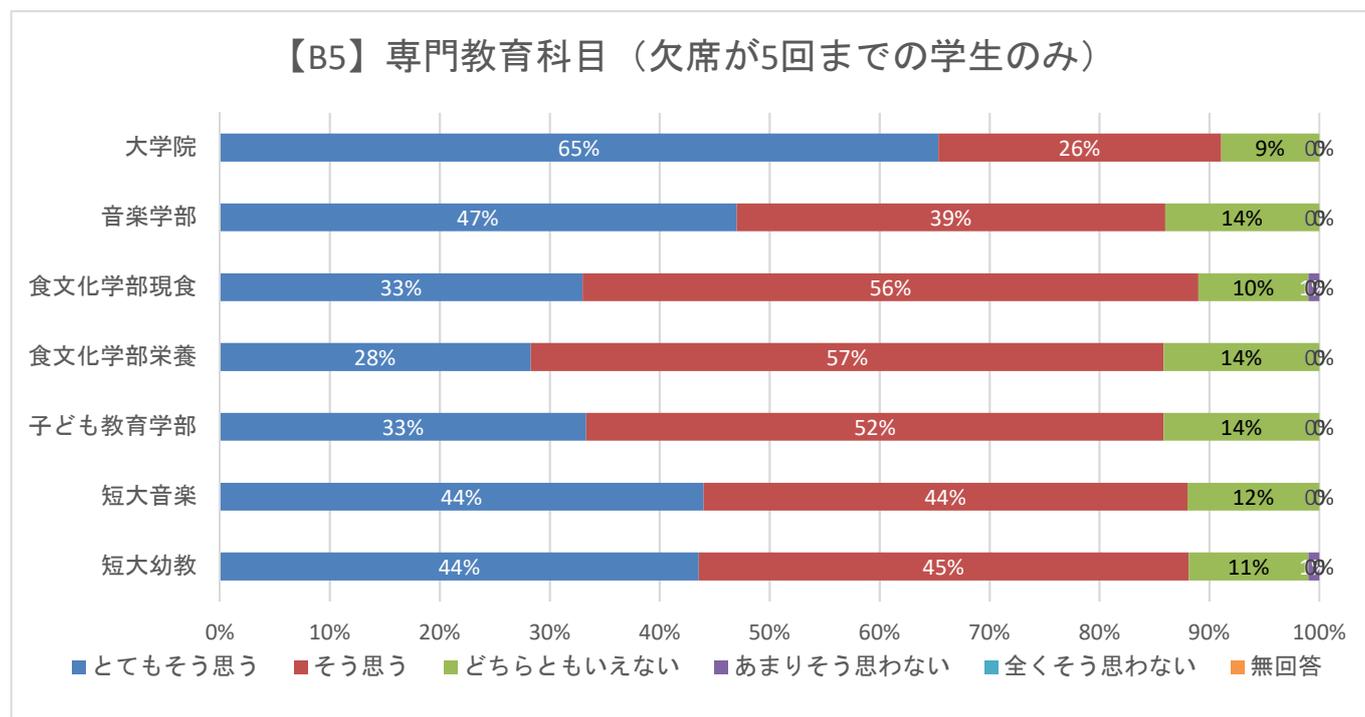
※以下の「B 教員の授業態度や授業内容に関する質問」と「C 授業の成果に関する質問」についての結果分析においては、上記「A4 あなたは授業を適切に評価できると思いますか」という質問に「とてもそう思う」または「そう思う」または「どちらともいえない」と回答した者のみを対象とする。

## B 教員の授業態度や授業内容に関する質問

### 5. 授業の内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていましたか

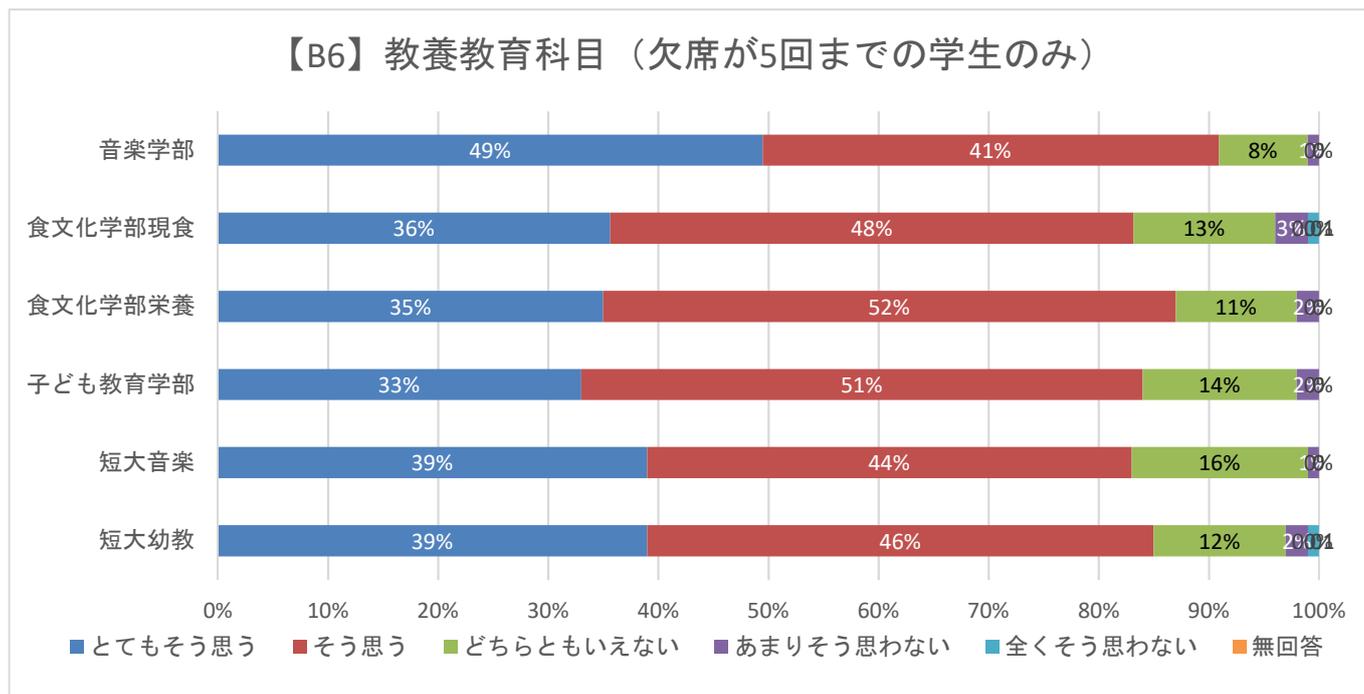


学生の78%～89%(H29年度69%～80%)が教養科目の授業内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていると肯定的に回答している。したがって、シラバスに基づく授業の割合はH29に比べて増加したと認識されている。

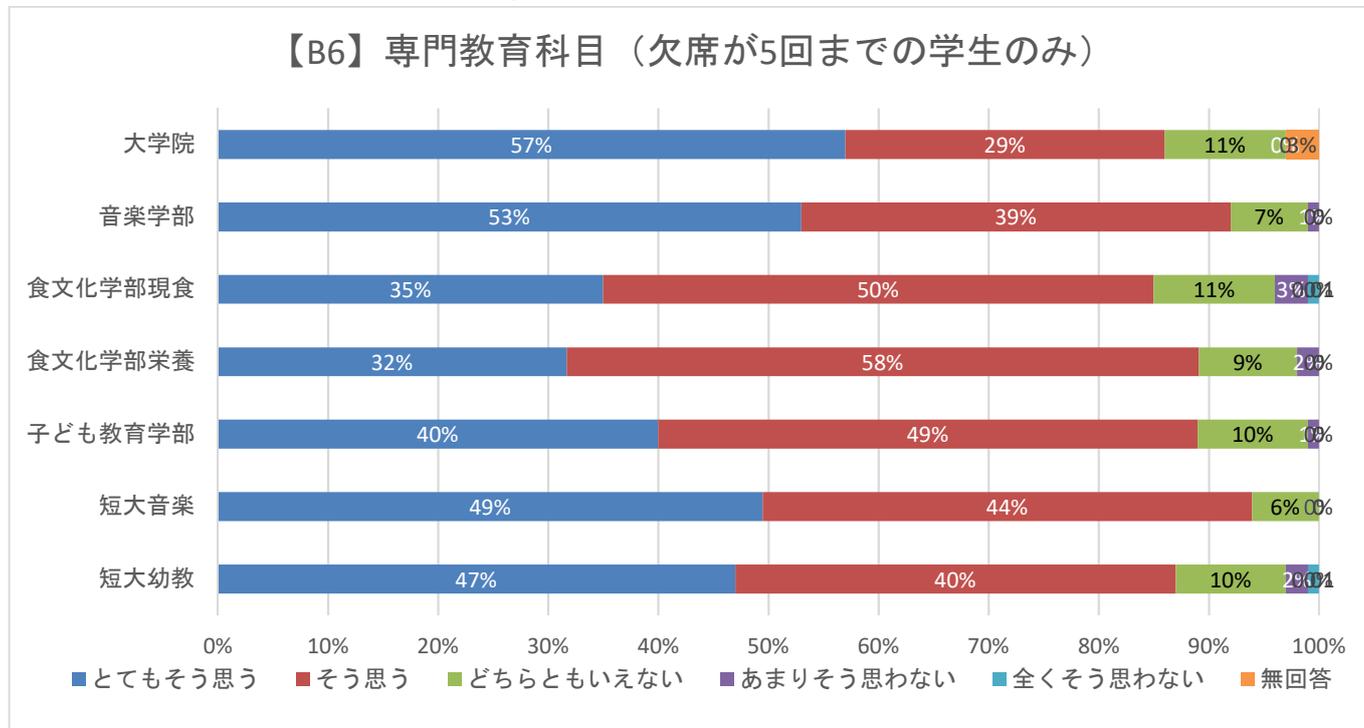


学生の85%～91%(H29年度78%～88%)が、専門科目の授業内容は授業概要（シラバス）の内容に沿っていると肯定的に回答している。教養科目におけると同様、シラバスに準拠した授業が展開されている結果だと考えられる。

## 6. テキスト・配付資料・板書・パワーポイントの提示は適切でしたか

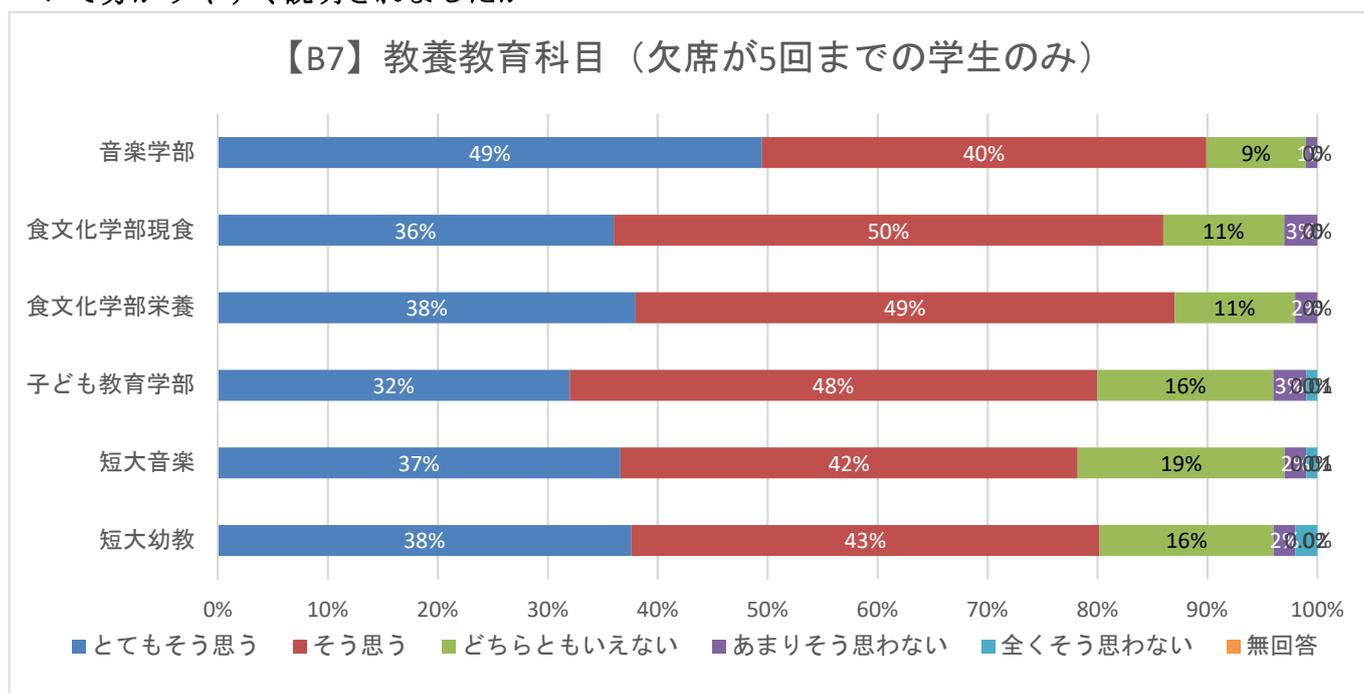


教養科目におけるテキスト・配付資料・黒板またはホワイトボードにおける板書・パワーポイントによる授業内容の提示は適切（「とてもそう思う」または「そう思う」）だという肯定的回答の割合は83～90%（H29年度73～89%）であり、学生の捉え方は概して良好である。また、H29までは各部局の学生の評価は一様ではなかった。しかし、やや低い評価をしていた子ども教育学部生と短大幼児教育専攻生の肯定的回答率が上昇した結果、部局間にあった評価の差はほぼ解消した。

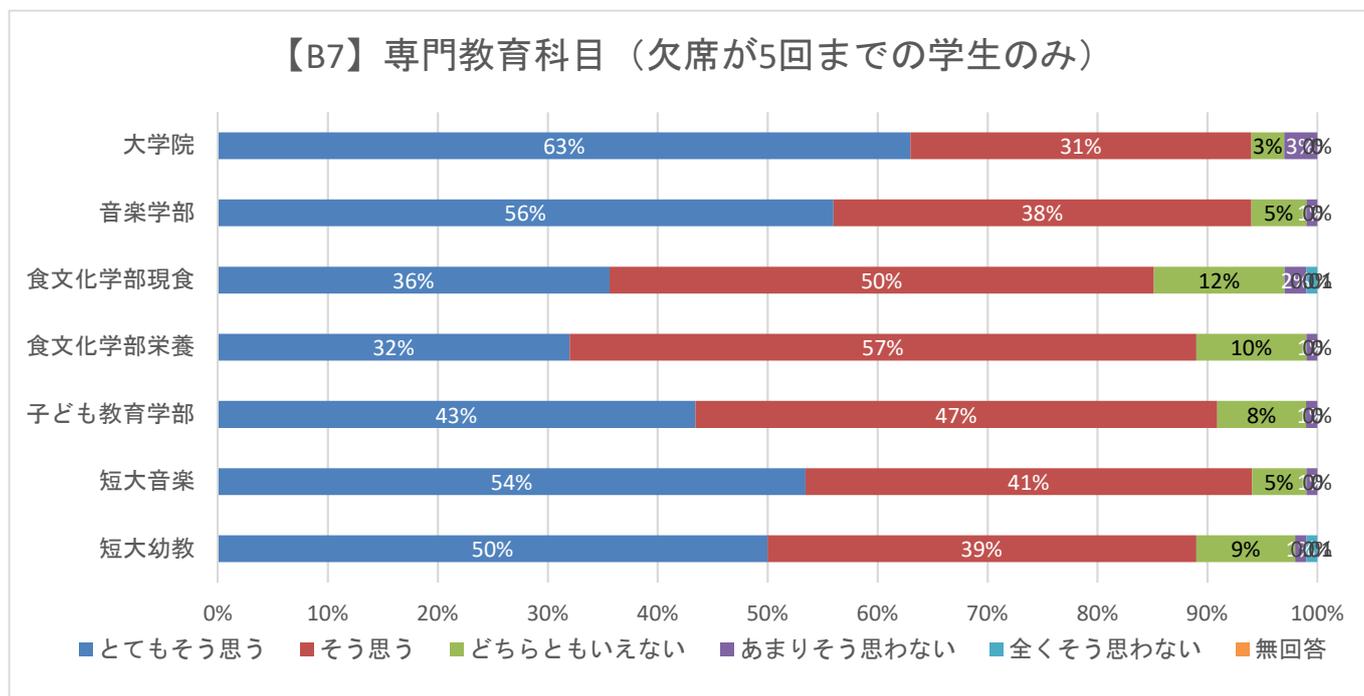


学生の90%前後（大学院生は82%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答しているので、専門科目におけるテキスト・配付資料・板書・パワーポイントによる授業内容の提示は適切だといえる。また、H29の評価では部局間に評価に関する差があった。しかし、H29 やや低く評価していた大学院生と短大幼児教育専攻生の肯定的回答率が H30 は上昇したので、部局間の評価の差は縮まった。

7. 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか。または演奏の技術や音楽表現について分かりやすく説明されましたか

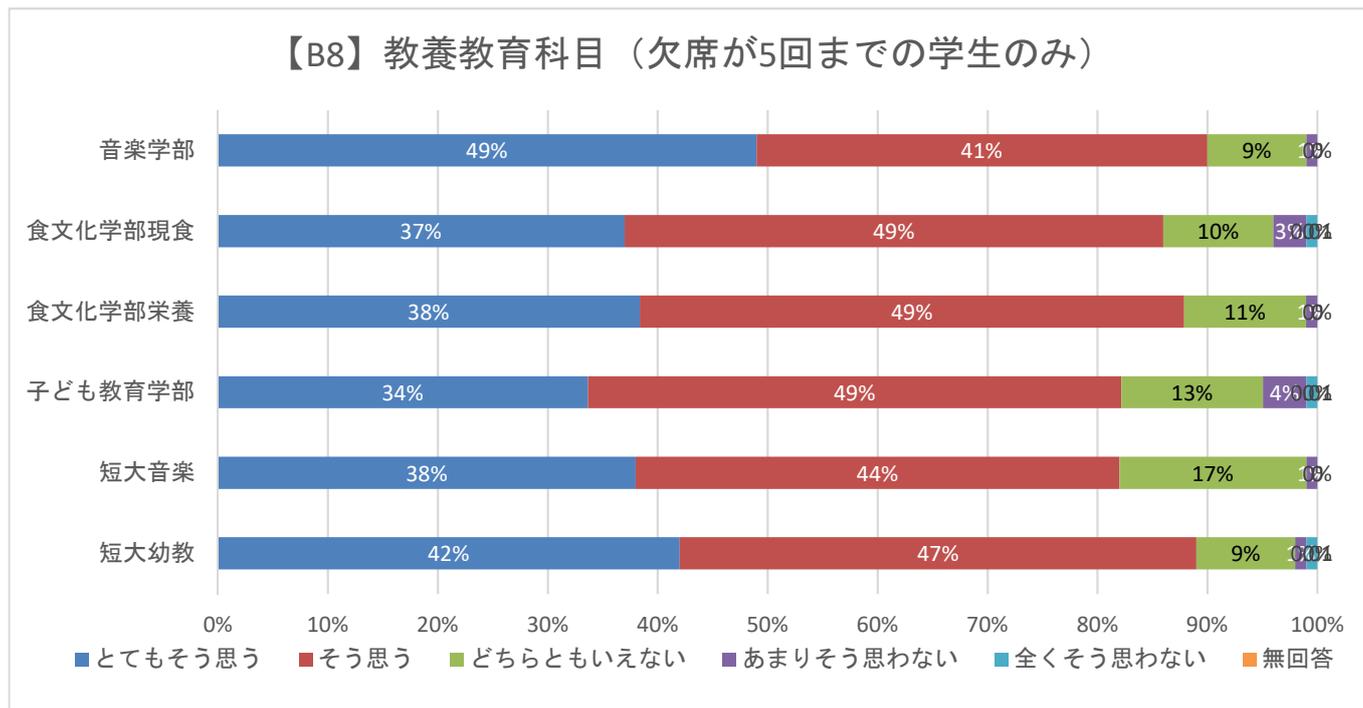


教養科目に関しては、学生の79%～89% (H29年度69%～88%)が理論、考え方、専門用語、演奏技術および音楽表現について分かりやすく説明されたと認識している。「とてもそう思う」または「そう思う」の肯定的回答率は音楽学部生、栄養学科生、現代食文化学科生において高い。

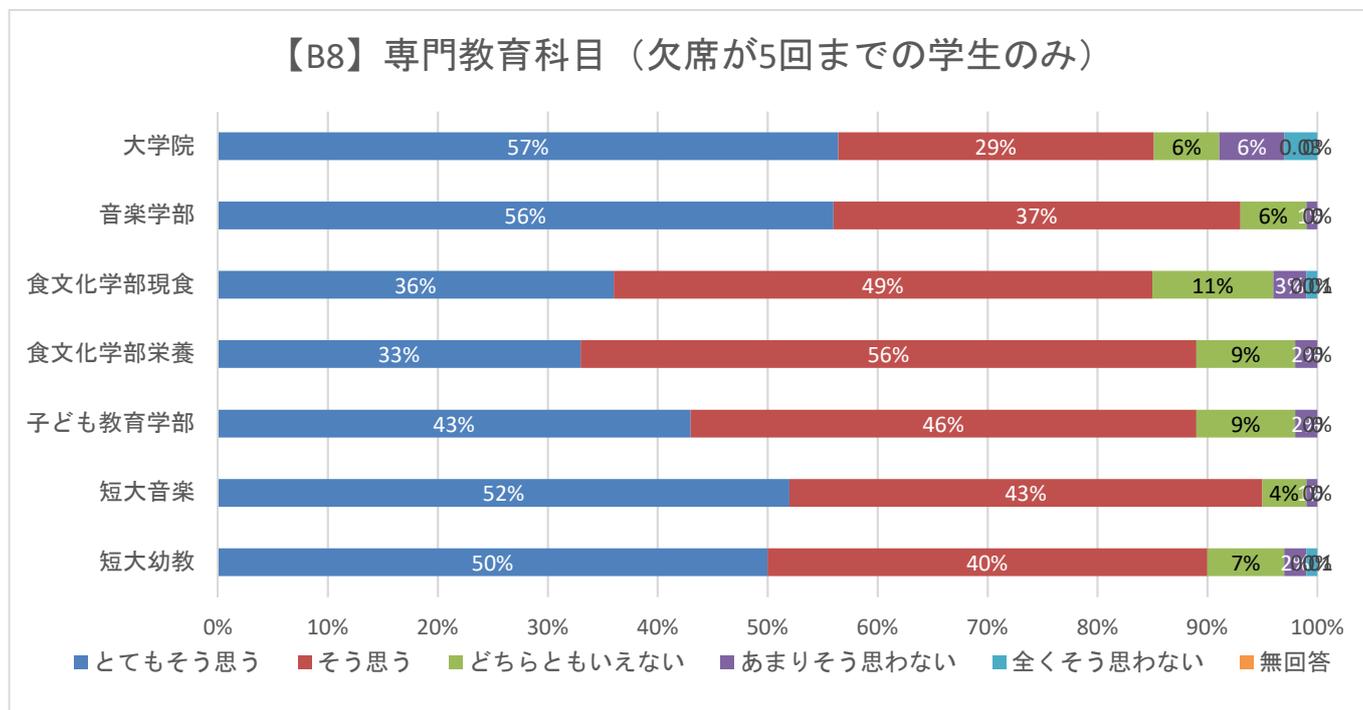


専門科目に関しては、学生の86%～95% (H29年度87%～95%)が「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答しており、理論、考え方、専門用語、演奏技術および音楽表現について、昨年同様、分かりやすく説明されたと認識している。学生の実態に合った説明がどの授業においてもなされていると考えられる。

## 8. 授業方法の工夫や時間配分は適切でしたか

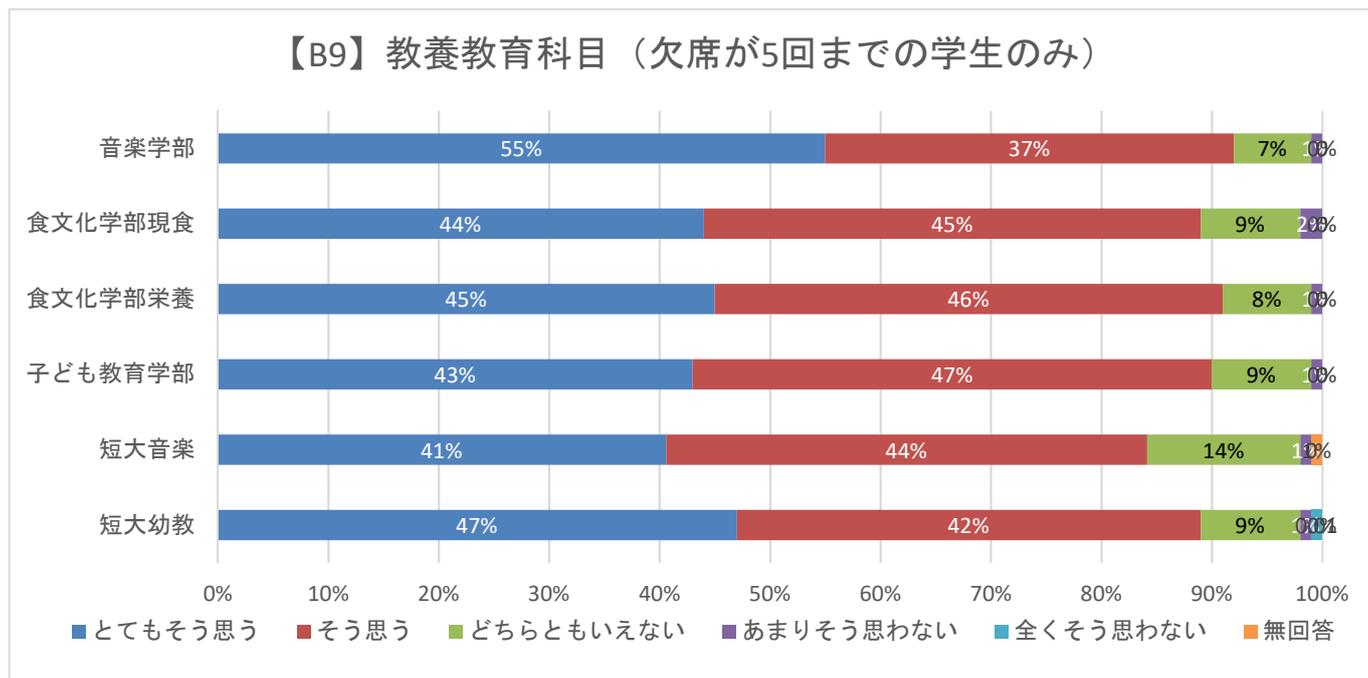


教養科目における授業方法の工夫や時間配分の適切さについて「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答している学生の割合は82%~90%(H29年度76%~88%)と概して高い。H29は短大幼児教育専攻生の肯定的回答率が他部局生のそれに比べてやや低かった。しかしH30年度は、幼児教育専攻生の肯定的回答率が上昇したので、部局間の評価の差も縮小した。

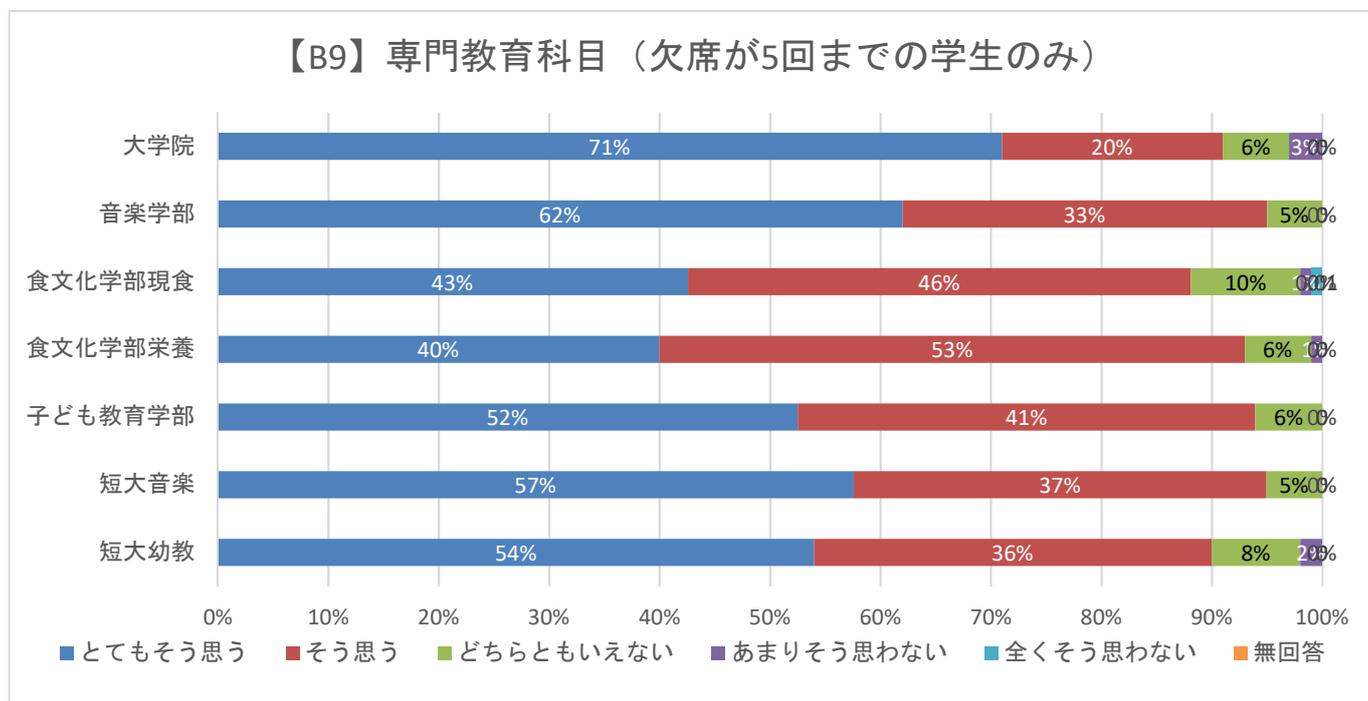


学生の85%~95%(H29年度87%~95%)が専門科目における授業方法や時間配分の適切性に関して「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答しており、教養科目における授業方法や時間配分より適切であると評価している。なかでも音楽学部生と短大音楽専攻生の肯定的回答率が高い。

## 9. この授業に対する担当教員の意欲や熱意を感じましたか

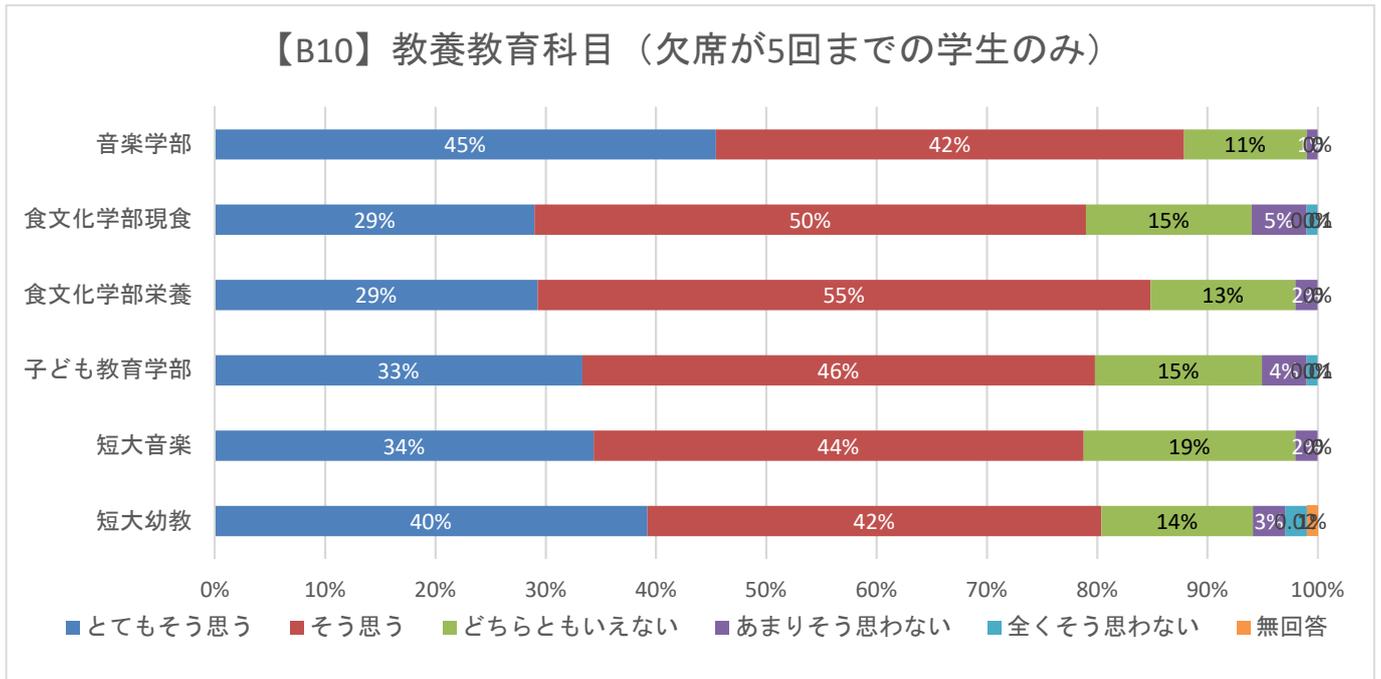


教養科目の担当教員に意欲や熱意があるかという問いに対して、学生の85%～92%（H29年度75%～92%）は「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答しており、学生は教員の授業に対する意欲や熱意を感じている。また、H29の結果と比べると、どの部局でも肯定的な回答率が上昇している。さらに、H29年度は特に短大幼児教育専攻生の肯定的な回答率が低かったが、それがH30年度には「上昇したので（75%→85%）、部局間の評価に関する差も縮まった。

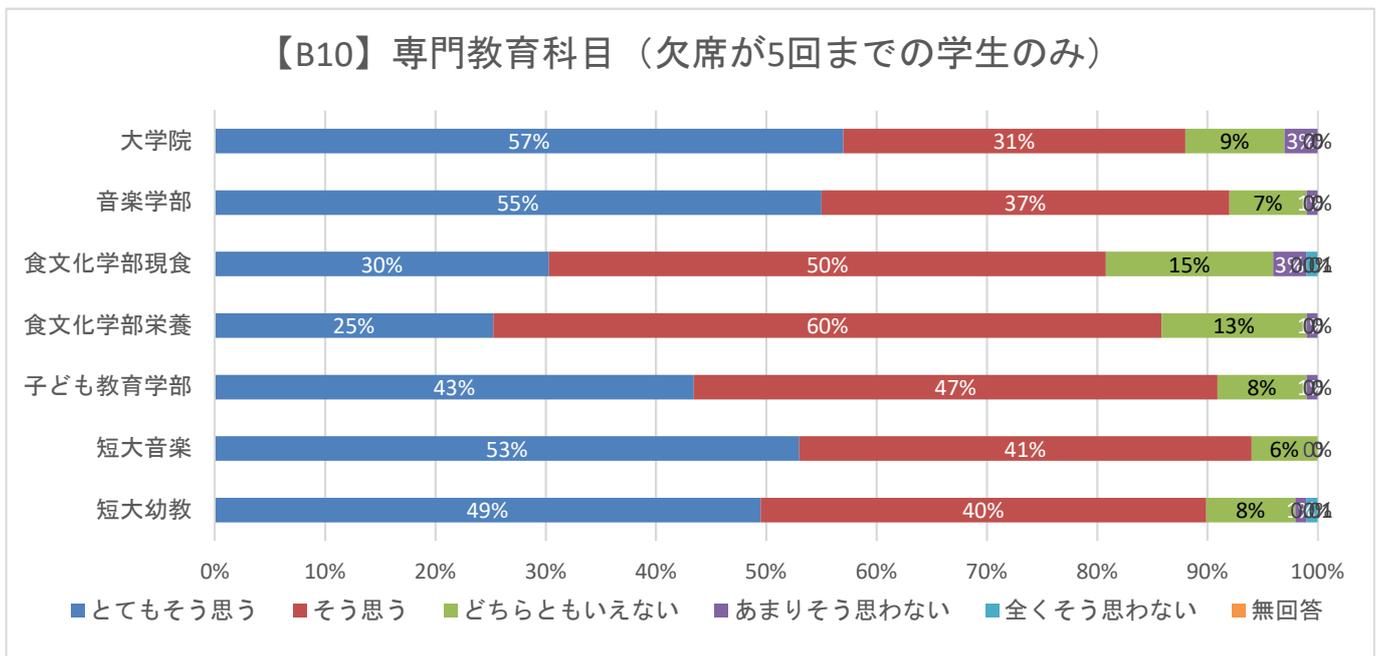


専門科目の担当教員に意欲や熱意があるかという問いに対して、学生の88%～95%（H29年度89%～95%）が「とてもそう思う」または「そう思う」と肯定的に回答しており、ほとんどの学生が、H29同様、担当教員の授業に対する姿勢に意欲や熱意を感じている。

## 10. 授業内容はよく理解できましたか



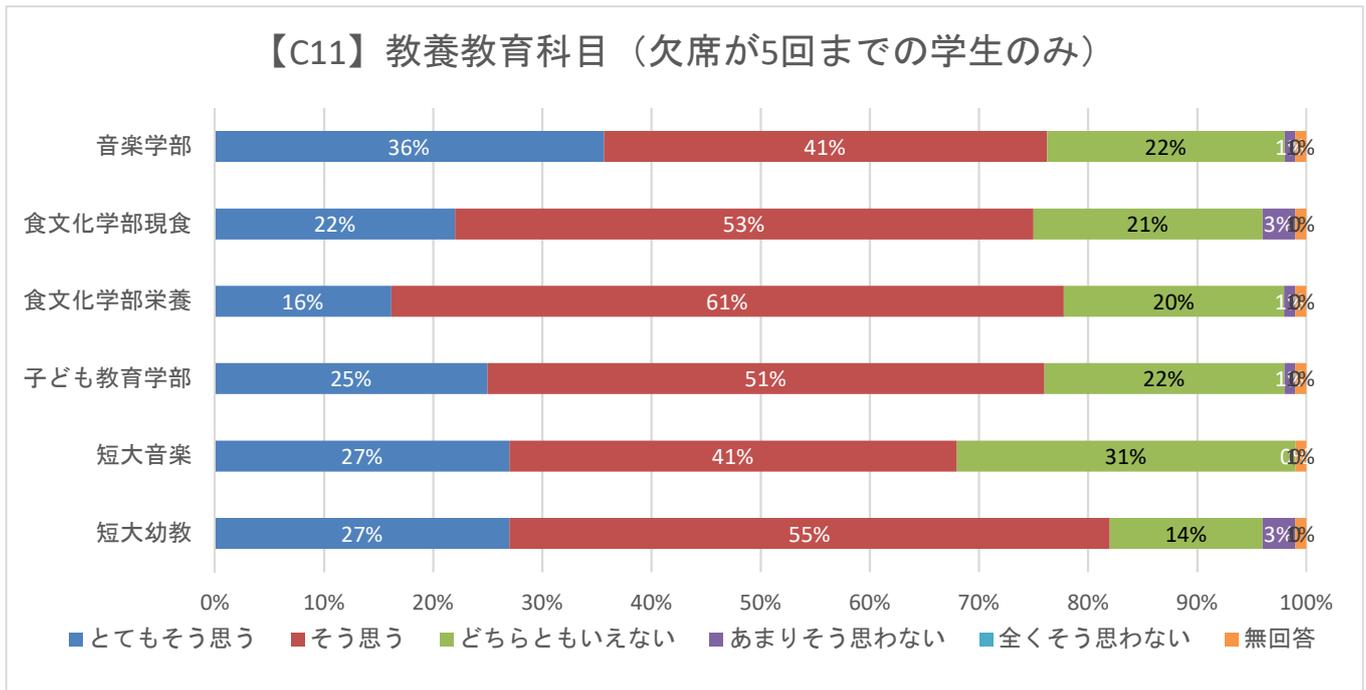
教養科目の授業内容の理解度については、学生の78%～87%(H29年度68%～84%)が「よく理解できている」または「理解できている」と肯定的に回答しており、学生の理解度は大半の部局においてH29年度のそれより高い。また、H29年度までであった部局間の評価に関する差異もほとんどなくなっており、全体的に授業改善が進行している。



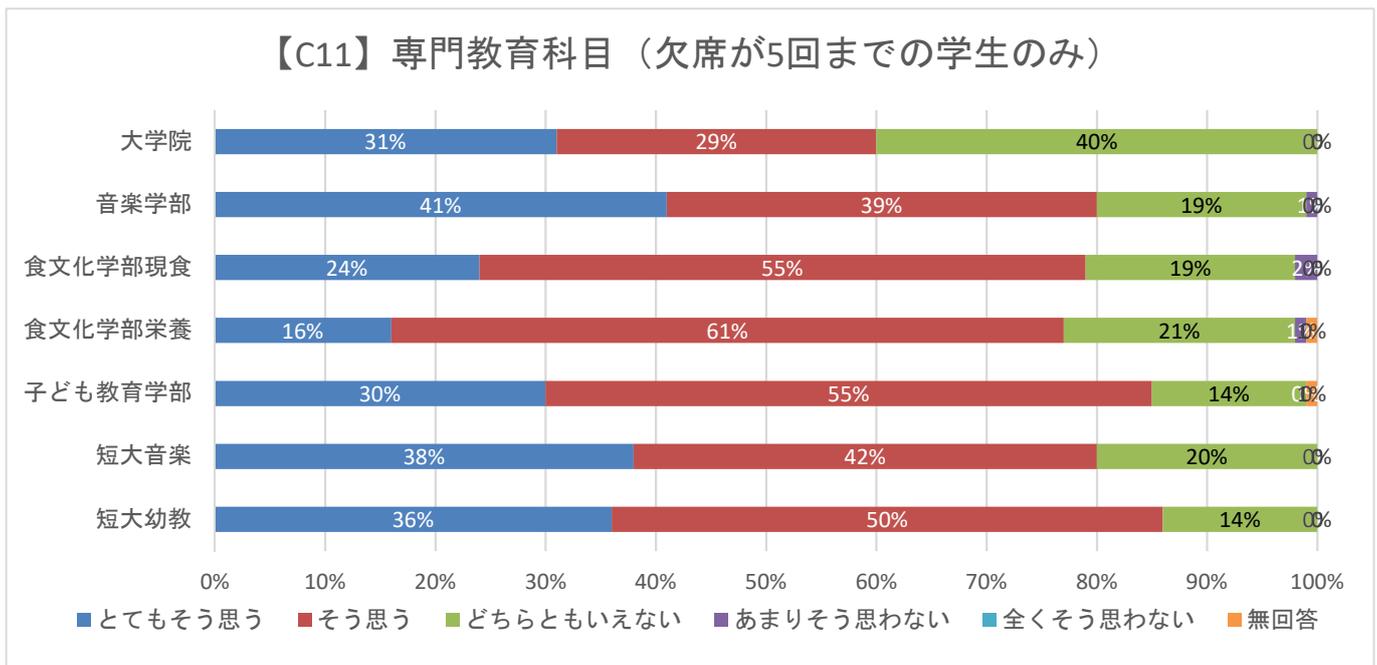
専門科目の授業内容の理解は指導方法との関連が深い、「全くそう思わない（全く理解できない）」と否定的に回答した学生は僅かである。教養科目に関する理解度と比べると、専門科目に関する理解度は全体的に高い。なお、一昨年およびH29の結果と比較すると、授業内容に関する理解度が大幅に上昇したのは大学院生(66%→82%→88%)と短大音楽専攻生(79%→89%→94%)である。

## C 授業の成果に関する質問

### 11. あなたはこの授業のシラバスに示している到達目標に達しましたか



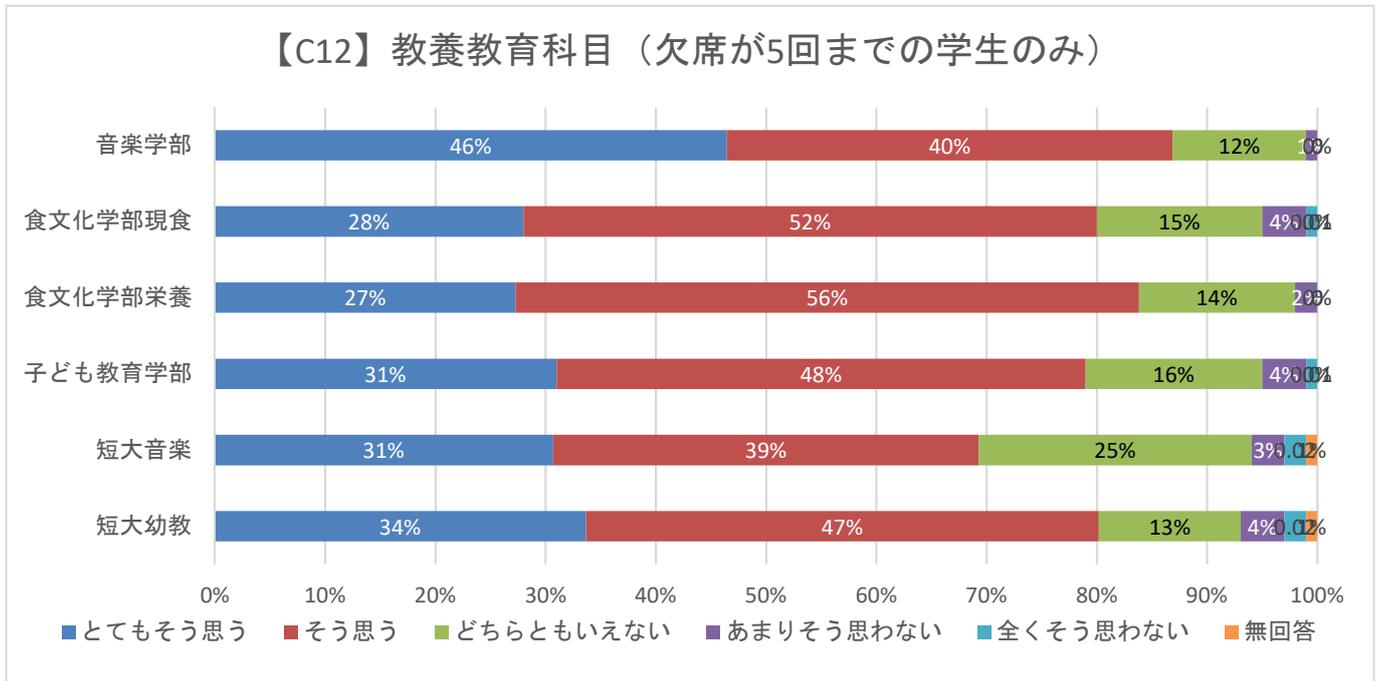
教養科目に関して各部局の学生が下した評価は一樣ではないが、「とてもそう思う」または「そう思う」という肯定的な回答の割合（到達率）の合計は68%～82%（H29年度56%～72%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の回答率の合計は1%～3%（H29年度2%～4%）である。したがって、学生は概ね目標に達したと認識しており、H29年度と比べると到達率の割合は増加している。部局別にみると、短大音楽専攻生を除いた各部局の学生の到達率は75%以上と高い。特に短大幼児教育専攻生の到達率はH29年度の66%から82%へと激増している。短大音楽専攻生の到達率は68%であり、必ずしも高くはないが、H29年度の56%と比べると上昇している。短大音楽専攻生が履修する教養科目における到達目標、授業進行、学生の意識などが改善された結果だと思われる。また、短大幼児教育専攻生の到達率もH28年度の水準に回復しており、効果的対策が取られた成果だと思われる。



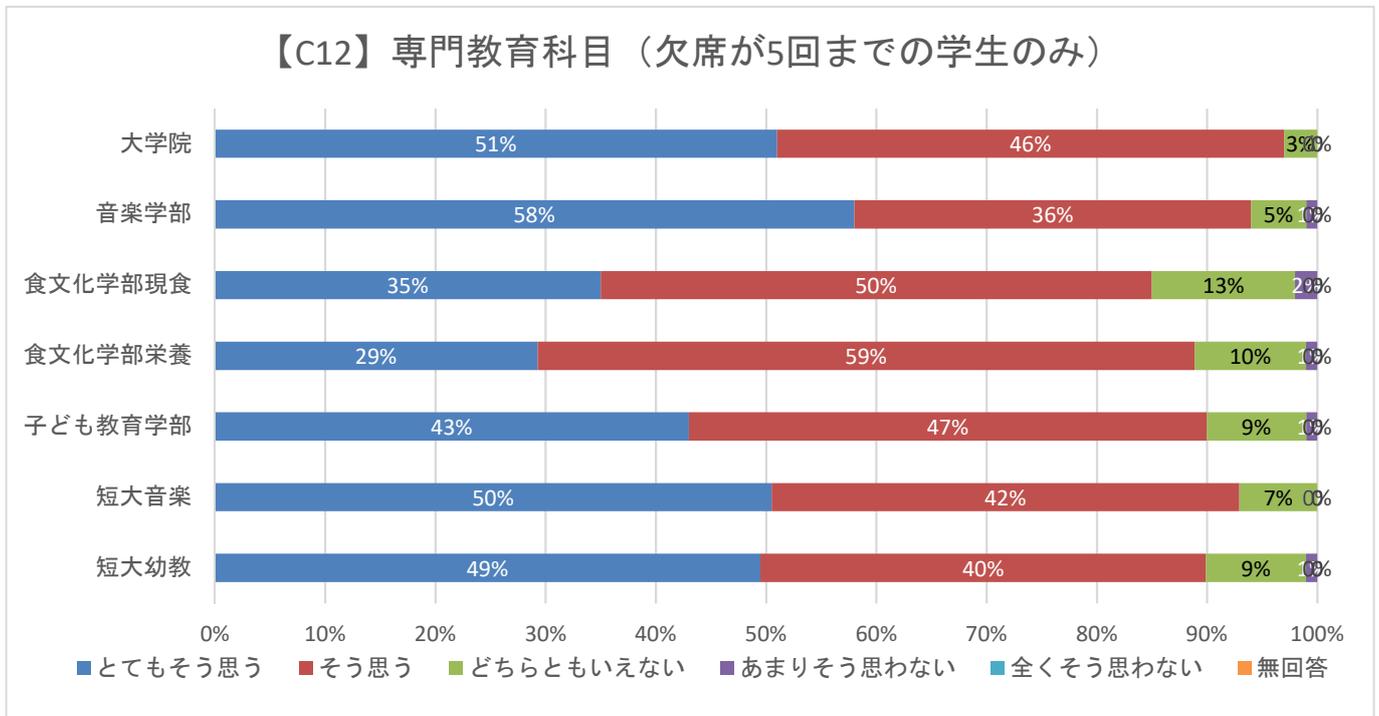
専門科目に関して到達目標に達したかという問いに対して「とてもそう思う」または「そう思う」の肯定的な回答率の合計（到達率）は60%～86%（H29年度62%～83%）であり、「あまりそう思わない」または「全く

「そう思わない」の否定的回答率の合計は0%~2%（H29年度0%~2%）である。H29年度の結果と比べると、部局間の不均衡がやや拡大している。また、大学院生の到達率は過去3年間60%前後で推移しており、順当だとはいえない。専門教育が主である大学院としては根本的な改善が必要である。

## 12. この授業の内容は興味深いものでしたか



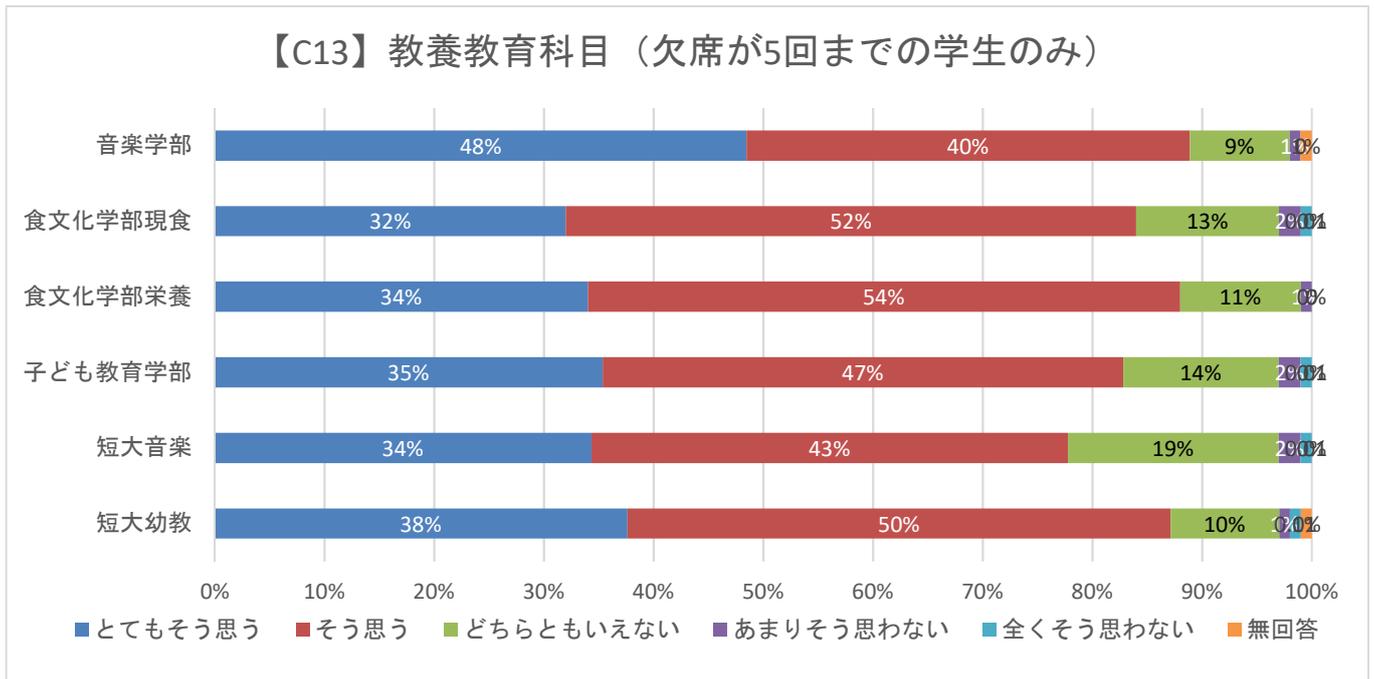
教養科目に関して「とてもそう思う」または「そう思う」という肯定的回答の合計（肯定率）は70%~86%（H29年度66%~83%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の否定的回答率の合計は1%~6%（H29年度4%~9%）である。各部局の学生の評価は一樣ではないが、肯定率は上昇傾向にある。なかでも短大幼児教育専攻生と栄養学科生の肯定率の伸びが著しい。



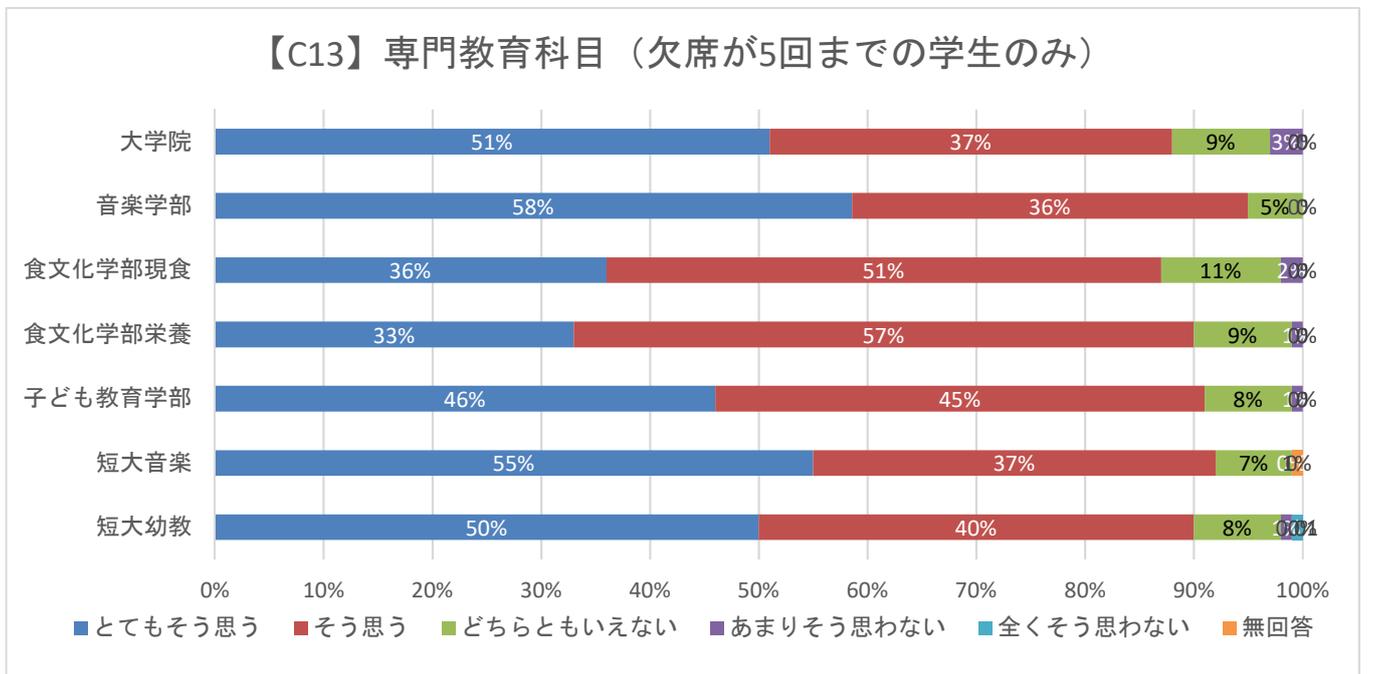
専門科目に関して「とてもそう思う」または「そう思う」の肯定的回答率の合計は85%~97%（H29年度85%~95%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の否定的回答率の合計は0%~2%（H29年度0%~3%）である。したがって、この3年間9割前後の学生が、履修した授業に興味深かったと評価していることになる。これは、教養科目に関する評価と比較すると、教養の修得よりも専門的知識・技術を修得した

いという学生の要求の現れだと思われる。

### 13. この授業は全体として良い授業であったと思いますか

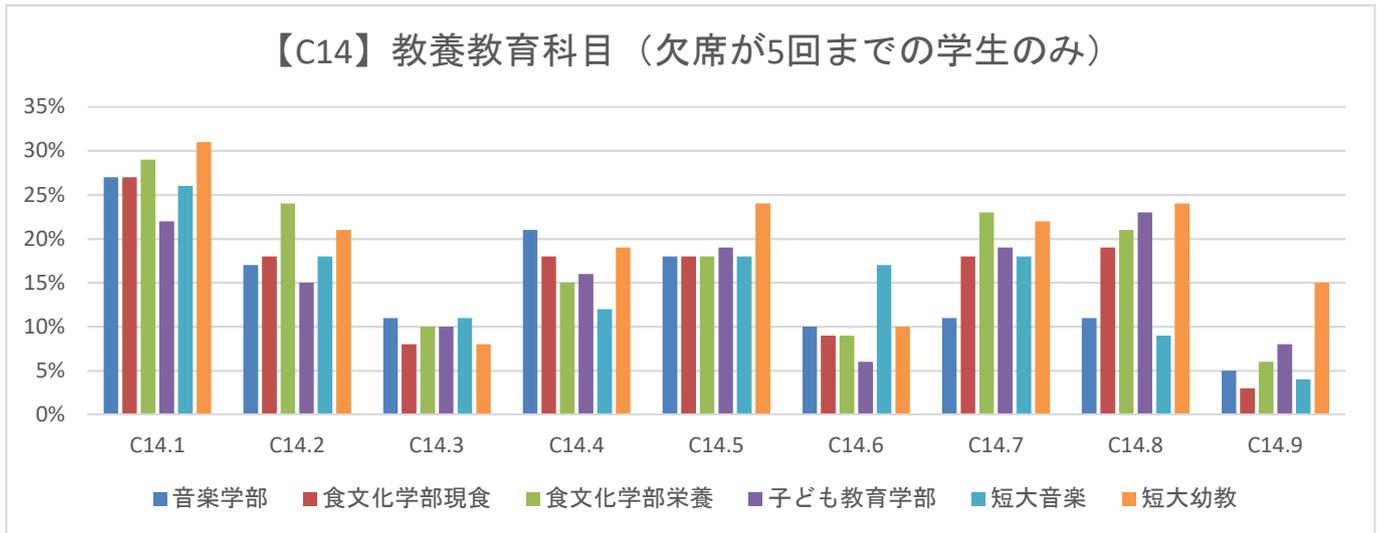


教養科目に関して「とてもそう思う」または「そう思う」という肯定的回答の割合の合計は77～88%（H29年度70～85%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の否定的回答率の合計は1～3%（H29年度3～7%）であり、学生の概ね8割以上が、履修した授業を良い授業であったと評価している。H29年度には評価が下がったが、H30年度の評価はH28年度の水準に回復した。



専門科目に関して「とてもそう思う」または「そう思う」の肯定的回答率の合計は87～94%（H29年度87～93%）であり、「あまりそう思わない」または「全くそう思わない」の否定的回答率の合計は0～3%（H29年度1～3%）であり、この3年間、学生の9割前後が、履修した授業を良い授業であったと評価している。教養科目に対する評価よりも高い評価が与えられているのは、専門科目の方が学生の要求に適っているからだと考えられる。

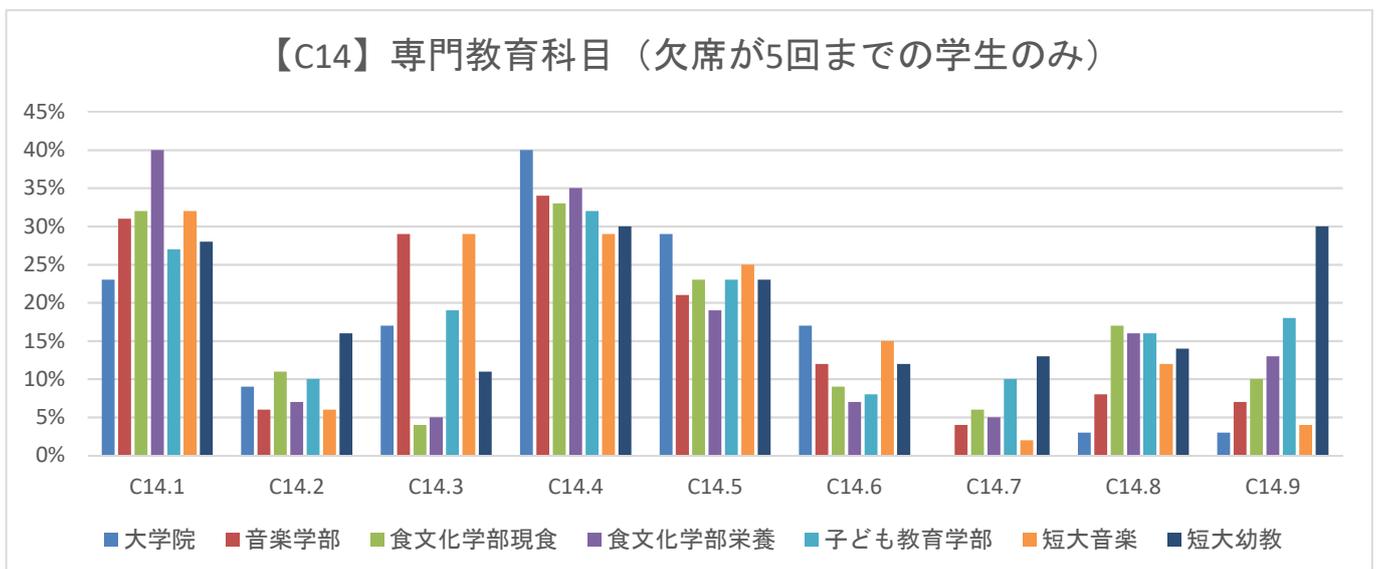
14. この授業を受けた成果としてあてはまる項目について、全てを選択してください



- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力やICT活用に力などが身に付いた。
- 14-2 人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった。
- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力が身に付いた。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた。
- 14-6 問題を発見して解決する力が向上した。
- 14-7 人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った。
- 14-8 コミュニケーション能力やお互いに協力し合う力が向上した。
- 14-9 職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた。

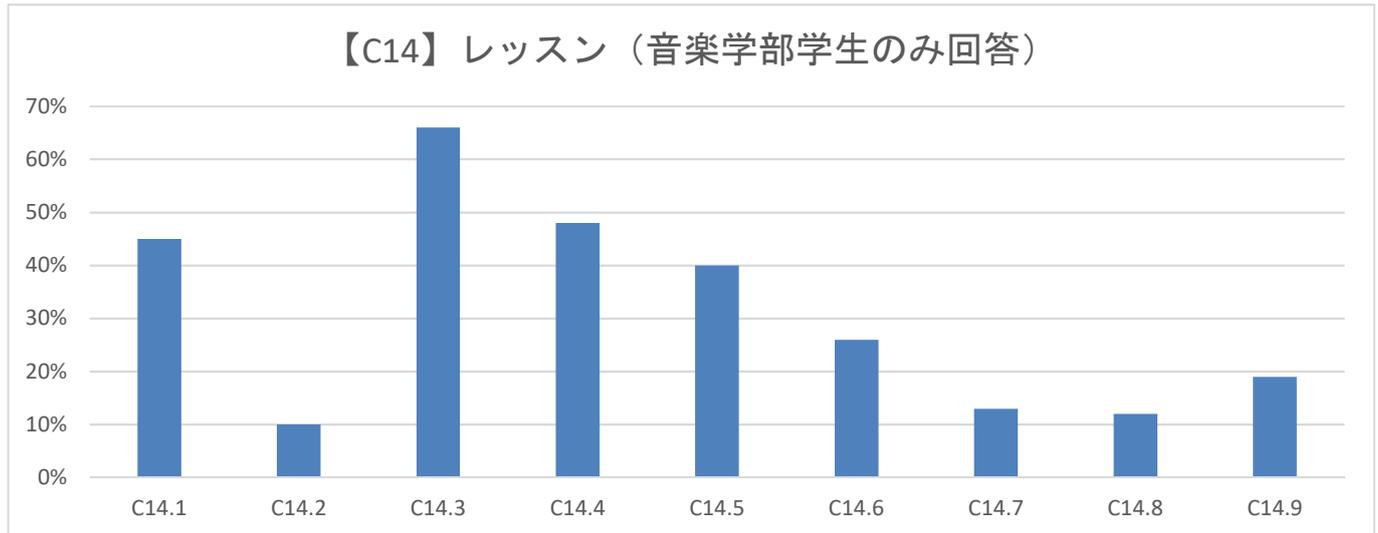
教養科目に関する各部局の学生の評価は必ずしも一様ではない。相対的に多くの学生が教養科目を履修した成果として選択したのが、H28・H29年度と同様、「専門的知識や技術、または言語能力やICT活用の力などが身についた」、「人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった」、「さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた」、「進んで取り組む実践力が身についた」、「人としての生き方を考えたり、人間形成に役立った」、「コミュニケーション能力やお互いに協力しあう力が向上した」という項目である。一方、比較的選択されなかったのが「表現力やプレゼンテーション能力が身についた」、「問題を発見して解決する力が向上した」、「職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた」という項目である。

各項目を選択した学生の割合は、H29年度の割合と比較すると、数%ずつ上昇している。これは、「授業評価アンケート」の結果が各授業担当者にフィードバックされ、各担当者が授業改善に努めた成果であろう。



専門科目に関して各部局の学生の多くが履修の成果として選択した項目は、H28・H29年度と同じく「専門的知識や技術、または言語能力やICT活用の力などが身に付いた」、「さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた」、「進んで取り組む実践力が身に付いた」である。この結果は、学生の専門教育志向という特徴を反映していると思われる。一方、比較的選択されなかった項目は「人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった」、「人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った」である。これらの項目は教養教育の成果を表すものだと考えられる。また、あまり選択されなかった項目としては、H28・H29年度におけると同様、「職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた」がある。成果として選択されない項目に関しては、引き続き検討を加えたり対策を講じたりする必要がある。

#### 14. レッスンを受けた成果としてあてはまる項目について、全てを選択してください（音楽学部のみ）



- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用に力などが身に付いた。
- 14-2 人間や社会、文化や自然などへの理解が深まった。
- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力（演奏技術や表現力）が身に付いた。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた。
- 14-6 問題を発見して解決する力が向上した。
- 14-7 人としての生き方を考えることができるなど、人間形成に役立った。
- 14-8 コミュニケーション能力やお互いに協力し合う力が向上した。
- 14-9 職業を選択する力の向上や、職業に就く意欲がわいた。

レッスンでは学生と教員が1対1で向き合い、学生個人に即応した内容および方法が提供されやすいことから、どの質問に関しても評価は総じて高く、自由記述の多くが高い満足度を表している。

今回のアンケートでは、「レッスンのどのような点が良く、そのことによって学生自身のモチベーションの向上がいかに得られたか」や、「レッスンによって次の行動がどう変化し、改善されたか」にまで言及した記述が見受けられた。また、否定的な記述が皆無であったことは特筆すべきであろう。教員が、前年度のアンケート結果を踏まえてレッスンの改善に注力した成果だと考えられる。

次に、レッスンの結果、学生の身に付くと考えられる力のうち、学生の40%以上が成果として選択したものを上位から順に4項目挙げる。

- 14-3 表現力やプレゼンテーション能力（演奏技術や表現力）が身に付いた、は学生の66%が選択。
- 14-4 さらに関連分野を学ぶ意欲がわいた、は学生の48%が選択。
- 14-1 専門的知識や技術、または言語能力や ICT 活用に力などが身に付いた、は学生の45%が選択。
- 14-5 進んで取り組む実践力が身に付いた、は学生の40%が選択。

最後に、自由記述の一部を抜粋して掲載する。

- ・作曲家ごとの表現のしかたの違いなども学ぶことができ良かった。
- ・分かりやすく、楽しいレッスンをしてくださってとても感謝しています。
- ・レベルに沿った指導をくださり、この数か月で成長が実感できました。
- ・的確なアドバイスをもらえて、自分でも技術が向上したと思えるレッスンをしてもらえた。
- ・今年度から取り組んだ曲が個人的に自分の声種に合っていたので音取りや曲の勉強をするのを楽しめたので良い勉強になりました。
- ・いつもピアノ曲を弾く時、音取りや曲の感情を分析したりして理解した上でレッスンに持っていきますが、レッスンの先生はとても丁寧に分かりやすく教えてもらえたので良かったです。
- ・自分の苦手な所を的確に見つけてもらえて改善できて良かった、いつも明るく楽しい授業でした。
- ・それぞれの作曲者の特徴や表現方法を分かりやすく教えて下さった。
- ・ピアノの技術がこの1年間で上がってきてよかった。
- ・レッスンで苦手な所やできていない所を的確に教えて下さるので頑張ろうと思えた。
- ・しっかり細かい所まで教えて下さり、自分の力にすることができた。
- ・その時の調子や体調を汲みとってレッスンして下さい嬉しかった。
- ・技術はもちろん音楽の楽しさが感じられるレッスンでした。
- ・自分の苦手な部分を少しでも達成できるように次につなげられるアドバイスを提示していただけた。

なお、レッスンについてのアンケートでは、A2、B5、B6、C11の質問項目には回答しなくてよいことになっていたが、各教員からの指示が徹底せず、一部の学生が回答してしまった。その結果、レッスン担当教員に不自然な数値がフィードバックされている。今後、指示の徹底が望まれる。

以上